

講演会

レクチャー・パフォーマンス『過去を再演する』

国際日本学部 国際文化交流学科4年 手嶋もも

二〇二三年六月二二日、現代アート作家である藤井光氏をゲストに招き、講演会が行われた。今回の講演では、『第一の事実』(2018)、『南蛮絵図』(2017)、『日本人を演じる』(2017)、『帝国の教育制度』(2016)の四つの映像作品について紹介・解説された。これらは全て、歴史的な出来事取材し、それを再演してもらい、映像化した作品である。

藤井氏によるレクチャー・パフォーマンスに参加し、その中で特に印象に残った二つの作品について紹介しながら、考察をしていきたい。

一つ目に紹介された作品は、『第一の事実』(2018)である。この作品で印象的だったのは、初めにスクリーンいっぱい大きさに映った頭蓋骨の写真である(写真)。古代ギリシャでは、適切な準備をしないと人は死ねないと考えられており、死ねないということは、迎えてくれる土地に行き着くことでもできず、行き場を失うということも人生最大の罰である。というような内容のアナウンスと共に、何体もの白骨化した遺体の全身映像に移り変わっていった。



Fig.1 並べられた遺骨。骨が残っている歯の状態から、どのような人間が処刑されたのかを調査する。



Fig.2 処刑された状況を演者が再演している場面。

その後、若い男性の集団が手首を繋がれ、行進している映像が流れる。彼らは静止し、1人ずつ頭を殴られ、体が床に落ちていく(写真)。次々に倒れ、コツ、コツと処刑をする者の靴の音が響き、処刑された遺体は埋葬場所へと運ばれていく。どのような感情もみえない機械的な動作の繰り返しは、静かな恐怖を感じさせるものだった。

この作品は、二〇一六年にアテネ近郊で発見された

八〇体もの白骨化した遺体について、彼らがどのようにして亡くなったのかを、現地の振付師や、演者によって処刑の再演を行なったものである。作品内には、遺骨の調査に関わった、考古学者や人類学者などへのインタビュー映像も記録されている。何故、発見された遺体を作品にしたのだろうか。反対に、作品にならなかった場合、彼らはどうなっていたのだろうか。無かったものにされてしまった可能性もあるだろう。また、調査や研究だけがされて終わっていた場合は、研究者たちによって、埋葬された状態から、「どのように」殺されたかを考察することはできても、「なぜ」殺されたのかは分からない。そこで、藤井氏は「どのように」という事実に加えて、「なぜ」という部分の考察・表現をする役割を、芸術という分野に担わせたのではないかと推測した。一つの事実に対し、真実は複数存在する。その真実のうちの一つを、『第一の事実』という芸術作品として再演した事で、事実を人々に記憶させるという行為を可能にしたのではないだろうか。

四つ目に紹介された作品は、『帝国の教育制度』(2016) (森美術館開館二〇周年記念展「ワールド・クラスルーム…現代アートの国語・算数・理科・社会」で展示中)である。この作品は、第二次世界大戦下に日本の教育制度についてアメリカ陸軍が軍内部での情報共有のために編集した資料映像と、作家が韓国で行ったワークショップを撮影した記録映像が交差しながら進行するものだ。アメリカが製作した資料

映像 (Fig.3) を見た韓国の学生が、藤井氏の指示を受けながら、その映像で起こっていたことを言葉や身体で表現する——つまり、再演していく (Fig.4)。

この映像作品で引っかけかりを感じたのは、韓国の学生たちが資料映像を見て、クスクスと笑っていた場面である。筆者には、一体、この映像のどこに笑える要素があったのか、すぐには見当がつかなかった。しかし、その後考えた時に、すぐに見当がつかなかったのは、過去に行われていた自国の教育についての映像を見ても、「そういうもの」だと理解しているからだろう、と気付いたのである。この作品を通して、自分の中で図らずしも「固まっていた」思考の存在を認識した。自分は柔軟な思考の持ち主だと主観的には思っているが、それは、日々の生活で知らぬうちに固められた思考なのだ。この作品を通して、日本と同じく「島」のようになったその思考から脱却するための役割を、アートに感じたのだった。

作品を通して、歴史とアートの深い関わりと共に、現代社会の問題へのアプローチも含まれていると感じた。今日では、真実がまるで事実かのように語られている、という危機的な状況を人々に喚起する働きが、事実と真実の差異の表現に込められているのではないだろうか。また、自分たちが学んできた歴史も、事実



Fig.3 校庭で手を繋いで円になり、中心に向かって歩く生徒達の映像の場面。



Fig.4 ワークショップで、Fig.3の映像を再演する韓国の学生たち。

のような真実かもしれないし、別の場所で事実として学ばれている歴史も、真実なのかもしれない。それぞれで主張が違っていて当然であると思った。過去を再演する事で、自分自身に外部からの目を取り込み、多様な角度から物事を見つめ直す機会を得ているのだと考えた。

* 作品画像は、藤井光氏にご提供頂きました。

この場を借りて、御礼申し上げます。

1. 「HIKARU FUJII WORKS The Primary Fact 《第一の事実》」
<https://www.hikaru-fujii.com/works/the-primary-fact-2/>
 (二〇二三年七月二十五日閲覧)

2. 「HIKARU FUJII WORKS The Educational System of an Empire 《帝国の教育制度》」
<https://www.hikaru-fujii.com/works/the-educational-system-of-an-empire-2/>
 (二〇二三年七月二十五日閲覧)

プラスアイ編集スタッフ募集中!

人文学会学生部会発行の「PLUSi」の企画・編集に携わりませんか?
 月に2回ミーティングを開催しています(主にみなとみらいキャンパス)。
 詳しくは <http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/intro/index.html> まで
 また秋には「学生文化奨励賞」も開催しますので、奮ってご応募ください。



PLUSi Alius VOL.2
 編集・発行
 制作協力

2023年9月29日発行
 神奈川大学 人文学会学生部会 PLUSi 編集部
 富士オフセット株式会社